

## 日本山岳会と私の登山④

# 多様なヒマラヤ登山が 存在した時代

山本宗彦

70年代以降80年代にかけて、日本山岳会のヒマラヤ登山は、高い目標をかかげながら、多くの若い登山家を育ててきた。第4回目は、鹿野、重廣両氏の薫陶を受けた山本宗彦氏に、学生部のボゴダからカンチエンジュンガ縦走まで、当時の登山界と日本山岳会の役割も含め、綴ってもらった。

### 80年代初めから90年代半ば

私の日本山岳会における高所登山はごく限られた時期のわずかな経験でしかないが、私自身はヒマラヤ登山隊のなかで日本山岳会の隊に最も多く参加してきた。80年代初めから90年代半ばまで、そのころはさまざまな高所登山が何回

も実践されたところであり、高所登山が山岳会の活性化にも大きな役割を果たしていたような時期であった。

私が日本山岳会の高所登山に参加したのは、学生部による1982年のボゴダII峰が最初で、山岳会への入会もその時になる。当時

を振り返ってみると、そのきっかけは偶然だったとしても、その背景には日本山岳会がそれまでの海外登山の実践を基にして、会としてそれらをさらに幅広くレベルアップしていこうとしていた時期であったと思う。

私がヒマラヤでの高所登山を始めた時期は、組織的に大人数で登る方法が多かった時代だった。この包囲法は、ある意味では前時代的と言われても仕方がないものの、高所登山を始めたばかりの人間にとってどれだけ大きな意味を持つかということをもう一度検証する必要があるだろう。私にとって大変有効に作用した日本山岳会の会としての考え方や活動状況は、今振り返るとひとつの教育カリキュラムのような機能を果たしていた

ように思える。この点は偶然とはいえ、大変興味深いものがある。

### 学生部主体のボゴダ登山

私の初めてのヒマラヤの高峰であるボゴダII峰は、学生部主体によるボゴダ5年計画の2年目にあたるもので、5年連続してボゴダ山群に登れる許可を取得したという自体大変先見性を持ったものであったと思う。これは日本山岳会の特に関心人たちのために許可を取得し、計画そのものは毎年の登山隊に任せるといふ大変画期的なもので、現在ほとんど山岳会で失われつつある教育機能を具現化したものであったと考えられる。

ボゴダ山群の約5000mという標高は、ヒマラヤの高峰のなか

ではむしろ低い方になるが、総合的にみてヒマラヤの高峰での経験の浅い者や初心者にとって、経験を蓄積していく場として大変適した山城であったといえるだろう。

しかも当時のボゴダ山群は、適度に情報量の少ない山であったことも大変重要な点であったと思う。

さらに私にとって運が良かったことは、経験高度を段階的に高めていくことができたことだ。ボゴダⅡ峰で5362mを経験し、翌年、1983年のパミール高原では、7010mと7495mを経験することができた。

実際の高所登山において、いきなり8000m峰へ行くというよりは私は少々懐疑的に考えている。高所での生体反応は決して教科書通りではないので、自ら徐々に高度を上げて経験を積んでいくしかないと思うからだ。かりに結果として8000m峰を登ることができたとしても、それはきわめて高いリスクを抱えており、チームの構成によっては予想外の重大な事態に対応できない可能性もある。低所から高所へと経験するなかで、自分の体がどうなるかということ、を自ら把握しておくことが重要で

あると同時に、また初めて8000m峰のような高峰へ行く場合は、登山隊としての救援能力を持っていることが大事なことだと思う。さらに付け加えれば、いきなり8000m峰へ行き、それに成功してしまうと、それよりも低い山々にあまり目を向けなくなる傾向があるようだ。高さは山の重要な要素であろうが、それがその山のすべてではないはずである。しかし人間は、たとえば標高という数字のように最も分かりやすい部分だけをみて、多様で複雑な背景や内容に目を背けてしまうという傾向がある。

#### パミール国際キャンプとカンチ縦走

私はボゴダで初めての高所登山を経験した後、続けて日本山岳会のヒマラヤ登山隊に参加する幸運に恵まれたが、それはとりもなおさず日本山岳会内部でも多様な登山を實踐できる機運が維持されていたということではないだろうか。1983年の旧ソ連パミール国際キャンプと1984年のカンチエングンジュンガ縦走は、何から何まで大きく異なる登山だった。そうした特徴のまったく違う登山がほと

んど平行して実践されていた事実も、今振り返ると実に貴重なことであったと思う。パミール国際キャンプは、純粹に高々度における自分の肉体の適応能力を体感するには最適のものだった。このとき登ったレーニンとコムニニズムは、結果的にアルパインスタイルに近いものとなり、レーニンでは5300mのC2を

一度往復した後にC2に泊まり、翌日は7010mの頂上を往復したし、コムニニズムではBCから往復行動なしで登り続け、6000mのC2から一気に7495mの頂上を単独で往復することができた。

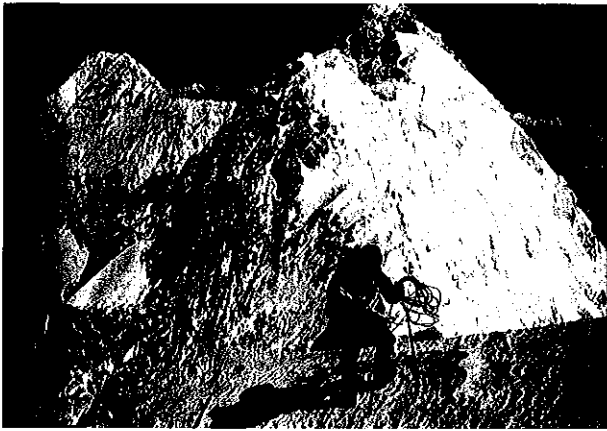
1983年のパミール国際キャンプは、自分の肉体面における実驗登山のようになったが、ここで7000m台でも自分の体は通用することがわかると同時に、東欧やソ連のクライマーたちのクライミングに触れることができたのは



ボゴダⅡ峰から山群一周の試み。右が東陵のコル

大きな収穫だった。そして翌年、いよいよ初めての8000m峰登山に参加できるチャンスに恵まれた。1984年のカンチエングンガ縦走登山隊に参加した理由はこれが縦走登山だからであり、私自身はまったく高所登山の実績がないにもかかわらず自分が縦走するのだと勝手に思いこんでいた。メンパーへの、「4つの頂上のうちどこに行きたいか」というアンケートにも、私は何のためらいもなく「縦走隊」と書き、「それがダメなら南峰」と書きこんだ。当時、南

峰はまだ一登しかされていなくたはずで、きっとその後もほとんど登られないだろう、人が行かないところがいいという気持ちが強かったように思う。あとで鹿野勝彦隊長から「臆面もなく縦走隊と書いたのは山本だけだ」と言われて、私は逆に「縦走登山隊なのに、なぜ縦走隊を希望しないのだろう」と大変不思議に思ったものだ。みんなは縦走したくないのだろうか、それならばなぜこの登山隊に参加したのだろうかという気持ちだつた。



カンチ南峰より縦走に挑む。右手主峰の手前が中央峰

私は参加が認められた喜びと目の前の役割をこなすことで精一杯で、あとは何も考えられないというのが正直なところだった。それでも私は、大登山隊が初めてであったこともあって、最初から最後まですべてが新鮮な驚きの連続だった。さらに先発隊で最も早く現地入りし、登山終了後も残務処理のため最も遅く帰国したこと、約半年近くもネパールに滞在し、二度とできないような貴重な経験をたくさん積むことができた。あ

のときの経験はその時の時代背景を考えても、おそらくいくらお金を積んでも今では決してできないことだろうと思う。

登山において何に価値があるのかという論議はしばしば行なわれることで、ここでは困難性や方法論がどうしても話題の中心になる。それはそれで当然のことかもしれない。そういう点では、このカンチエンジュンガ縦走登山隊は時代遅れの大登山隊だと言われたし、その後ソ連隊があつたという間に4峰すべてを完全縦走

してしまったことで、事実としてこの登山隊の登山史における位置を決定づけたかもしれない。

しかし、この登山の価値はそういったグローバルな視点からのものだけではないはずで、いわゆる鳥の目から見た価値だけではなく、参加した人間の目、虫の目から見た価値というものもあるはずだ。

私自身はカンチエンジュンガ縦走登山があつたことで、その後の85年のマッシュヤールム北西壁とブロード・ピーク速攻、87年のラカポシ東峰、88年のチョモランマ三国友好登山、95年のマカルー東稜への参加が実現したとも言える。カンチエンジュンガも含めて、その時々で行なわれた大きな高所登山と、その間隙を縫う小さな高所登山の絶妙なコンビネーションが輝いていたところに、日本山岳会の高所登山に関わったことは大変幸運であつたと思う。

### ヒマラヤ登山の多様性

私が参加した日本山岳会の登山隊で得た経験から、結局は「誰がなんと言おうと、日本山岳会にしかできない登山を実践する」ということに尽きると思うが、それは

また「その時々々の風潮に惑わされることなく、少人数ではできないような大きな登山を、組織の力で実現させる」ということだろうと思われる。そのなかに、教育機能や救援機能が包括され、大登山隊そのものが高所経験初心者にとってベテランから学ぶことのできる場ともなるはずだ。

結果的に大登山隊で学べることは、決して高所登山のノウハウや肉体の高所適応能力の確認だけではない。多種多様な生きざまをもつた人々と共に登山をして、彼らの言動を目の当たりにすることによって、驚き、感動し、呆れ、怒りを覚えながら自分の心の中で葛藤し、それらを自分の滋養にしていくことである。さらに自分という人間の枠を破り、厚みを増し、人間のネットワークを広げていくという何ものにも代え難い財産を、若い人たちにもたらすはずである。もちろん、そのために登るわけではなく、それらはいくまでも結果的、付随的なものであろう。しかし逆に、そういった機会を結果的にたくさん与えられる登山を作ることも、日本山岳会の役割のひとつではないかと思うのである。